

Title	修験道の験術：そのメカニズムと世界観
Sub Title	Occult exercises of Shugendo religion : mechanism and world view
Author	宮家, 準(Miyake, Hitoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1966
Jtitle	哲學 No.48 (1966. 3) ,p.47- 70
JaLC DOI	
Abstract	The present article attempts to reveal the hidden meanings of occult exercises of Shugendo religion, i. e. walking on fire, bathing in boiling water, etherealization of body, walking on sword-edge, flying in the air, etc. with special reference to the contexts of world view of that religion. To begin with, we assume that the actions in each exercise are symbolic, and analyze them to the level of meaning. By so doing, we recognize that the occult exercises, e. g. walking on fire etc. are the rites which symbolize the transformation of the exerciser into another being who possesses super-natural powers and who is in heaven. Shugendo has such a religious world view that recognizes the world of spirits in heaven, and that the occult exercisers, by becoming shamans, get access to that world and get informed of the causes of the fortunes and misfortunes of the actual world. Hereupon, occult exercises of Shugendo has the function, on the one hand of demonstrating the supernatural powers of the exercisers to his followers, and, on the other, to convince the exerciser himself possession of the religious power.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000048-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

修 験 道 の 験 術

—そのメカニズムと世界観

宮 家 準

序

1. 験術の現状
2. 験術の次第
3. 験術のメカニズム
4. 験術に見られる世界観

結

序

ごく最近でも、火渡り、刃渡り、湯立等の験術が時々修験者によって行なわれている。これらがテレビの番組をにぎやかにしたり、人々の話題にのぼることも多い。そうした場合には、これらの験術はその意味のわからないままに奇異の念を持って見られ、何かしかけがあるとか、いんちきであるとかいわれることが多い。けれども私は、これらはこのように一概に否定してしまうべきものではないと考える。こうした験術とて、もし宗教儀礼の一つとして考えるならば、儀礼が宗教的世界観を物語るものである以上、もともとは一定の宗教的世界観にのっとって行なわれているものと考えられるのである。

そこで、この小論ではこうした立場にたって、修験道の験術がいかなるメカニズムにのっとって行なわれているかを考えてみると共に、こうした験術の意味を修験道の宗教的世界観の中に位置づけて解明して見ることに

したい。

さて、本論に入るに先立ってまず簡単に修験道について紹介し、あわせて、筆者の験術分析の方法を提示しておくことにしよう。

周知のように、修験道は我国古来の山に関する信仰が、仏教、道教、儒教等の外来宗教の影響のもとに、平安時代末にいたり、特定の宗教体系を形造り、現在に及んでいるものである。そしてこの宗教は、山岳で修行をすることにより、超自然的な力を得た修験者が地域社会において依頼者の主として現世利益的な希求に応じて、呪術宗教的な活動を行なうことを中核としている。なお、教団体制確立後の修験道では、その伝説上の開祖として、すぐれた超自然力を持っていたといわれる役小角(奈良時代の人)を尊敬している。⁽¹⁾

私はさきにも記したように修験道の宗教儀礼の一種として験術をとりあげて見ることにする。ここで験術というのは修験者が自己の超自然的な力(験力)を示すために行なう宗教的行為と考えておきたい。そして修験道の験術を次のような立場からとりあげて見ることにしたい。

修験道の験術の中にもり込まれている多数の煩瑣なまでに密教的に脚色された意味のわかりにくい行為形式は、実際はそれぞれが何等かの意味を表象している symbolic action なのである。しかもこれら多数の symbolic action は何等無関係に並べられているのではなくて、くわしく分析して見ると、修験者の宗教生活に身近な主題——モチーフ——を中心として一つの体系をなすように組み立てられている。そしてこのモチーフに適切な諸要素が特定の験術の行為形式として定められてそのメカニズムとなっているのである。こうしたモチーフは更に修験道の宗教的世界観の中に位置づけられる。ここで私が宗教的世界観と呼んでいるものは、宗教行為が当然のこととして前提としていると考えられる存在の一般的秩序という意味で用いている。それ故宗教的世界観は何も密教の教義に色どられた修験道の教義そのものをさしているのではなく、修験者達が儀礼を行な

うにあたって当然の前提としていると研究者によって考えられるもの——修験者がそれを意識しているかないにかかわらず——をさしているのである。こうした修験道の世界観の方が、観念遊技的色彩のこい教義よりもむしろはるかに、修験道の性格を明確に示していると考えられるのである。

実際の分析は次のような順序で、こころみることにする。

まず、験術の次第中の個々の行為形式を symbolic action としてとらえてその意味を究明する。そしてこうした個々の symbolic action の意味をくみあわすことによって、その験術のメカニズムをあきらかにする。次に修験者がそうしたメカニズムによって意図していると考えられるモチーフを抽出する。そうしておいて、そのモチーフを修験道の宗教的世界観の中に位置づけて解釈する。ところで験術のメカニズムにしる、モチーフにしる、修験道の世界観の中に位置づけられるものであるとすれば、上記の分析にあたっては、修験道の神話伝説や私がこれ迄他の修験道の儀礼分析から抽出した修験道の世界観⁽²⁾や、修験道の思想等⁽³⁾も、その分析のてだてとして充分役立つであろう。また更に広く考えれば、修験道も人間の作り出した文化現象の一つである以上、これまでの諸学者による宗教的世界観に関する研究も充分参考にし得るであろう。

以上の立場に立って、本小論はまず修験道の験術の現状を記したあと、その次第を示し、次にこの次第からメカニズムとモチーフを抽出し、最後にその意味を修験道の世界観にてらして解釈してみるという順序ですすめて行きたい。

註 (1) 宇野円空「修験道」(日本宗教大講座所収)。

村上俊雄「修験道の発達」

和歌森太郎「修験道史研究」等参照。

(2) 宮家 準「修験道の入峰修行におけるシンボリズム」

哲学 46 集。

宮家 準「修験道における修法の論理

——息災護摩を中心として」

宗教学雑誌 5 号。

宮家 準「修験道における修法の論理
——諸尊法を中心として」

日本仏教 22号参照.

(3) 宮家 準「修験道の思想」

哲学 43集.

1. 験術の現状

和歌森太郎教授によれば、東北地方では山伏の間で師資相承によって伝えられた切紙作法があり、その中でも特に祈雨法・飛行法・劔渡法・火生三昧法(火渡り)・隠形術法(身かくし)・湯立神楽・不動金縛法等がとりわけ秘法とされていたとのことである⁽¹⁾。こうしたものの中でも、火わたりと刃わたりは特に有名であつたらしく、天保年間に記された行智の「木の葉ごろ裳」巻上にも、「火生三昧とて烈火を踏渡り、或は利刃を交えて梯として其上を踏行き、足を傷らむなどを行法と思へる所もありと聞ゆ⁽²⁾」と記されている。現在においてもこうした修験者の験術は日本全国随所で行なわれている。

例えば、まず火わたりに関しては、筆者が知ったものだけでも、高尾山の修験、五流修験、広島県東部の石鎚講、御岳講、富士講等多数のものがある。また岩崎敏夫氏の調査になる相馬地方の葉山まつりの例に見られるように、神がかりに先立って乗りくらが火を渡る式や⁽³⁾、九州阿蘇神社において乙女が巫に手を引かれて素足で火を舞いわたる式等⁽⁴⁾、修験道のみならず、修験道の強い影響を受けていると考えられる民間信仰、教派神道の一派、神道の一部等でも広く行なわれている。

湯立ては元来は生木三本でささえた釜の下で火をたき湯をにえたぎらしたのちにその中に白衣一枚の修験者が入る験術である。現在行なわれている湯立ての中では、毎年2月18日に熊本県長寿寺木原不動で行なわれているものが有名である⁽⁵⁾。これがより簡素化し、にえたぎるかまの中にささをひたしてかぶる形になったものには、本田安治氏の調査により発見され



第 1 図 修 験 者 の 火 渡 り

た、東北地方の法印神楽の一種としての湯立ての神事がある⁽⁶⁾。神道の湯立でもあるいはこの一種とも推定されよう。

刃わたりについては、残念ながら筆者はまだ実際に行なわれている場面を見たことはないが、さきに引用した行智の木の葉ごろ裳を見ても、近世には盛んに行なわれていたと考えられる。現在でも昭和40年5月に三峰山で御岳講行者による刃わたりが行なわれた。また羽黒山でもかって行なわれたとのことを戸川安宣氏からききもした。ところが修験者の刃わたりに類似した儀礼が三河の砥鹿神社のまつりで行なわれているという。これは、「祭儀の前段に、神職二人の間に据えておいた短剣を神歌につれて巫女がいわば ∞ 字型に廻りつつ踏み越える式⁽⁷⁾」であるといわれている。

隠形の術(みかくし)になると、現在行なわれているかどうかは不明で、わずかに修験深秘行法符呪集中に「不動隠形の大事」があること、不動根

本印中に隠形の印があることから、かつて行なわれていたことを推測し得るにすぎない。

飛行の術も同様で、それに類する印及び修法があるにすぎない。しかしながら神がかった人が鳥のように両手を横にひろげて高くとびあがるのは、筆者も五流修験や、岡山県久米郡の両山寺でかつて見たことがある。また羽黒山の松例祭でも両松聖の験くらべの一つとしてからすとびがおこなわれている。

寡聞の筆者がただ思いつくままにとりあげたにすぎないものの中にも、上記のような幾つかの験術を見ることが出来るのである。それ故更に詳細に調べたら、より多くの修験道の験術が現におこなわれており、またかつて行なわれていたと推定されるのである。このようなことを考えるならば、本論文において験術のメカニズムとモチーフを知り、更にその意味を修験道の世界観の中に位置づけて解釈して見ようとすることも、決して無駄なところみではないであろう。そこでまず、これらの験術の次第をながめることからこの小論をはじめて見よう。

- 註 (1) 和歌森太郎「山伏」 68 頁。
(2) 修験道章疏 三, 118 頁。
(3) 岩崎敏夫「本邦小祠の研究」 38 頁—39 頁。
(4) 杉本尚雄「中世の神社と社領」参照。
(5) 昭和40年3月27日 TBS より「かまゆで仙人」として紹介。
(6) 本田安治「陸前浜の法印神楽」参照。
(7) 西角井正慶「祭祀概論」 170 頁—171 頁。

2. 験 術 の 次 第

さきにのべた五種の修験道の験術に関する次第には次のようなものがある、まず火渡りに関しては、尊海編の修験常用秘法集におさめられている、火生三昧大事、嚙嚙撃天水生消火大事、火生三昧大事が有名である。他に

は三宝院編の修験聖典に大火生三昧法，嚙嚙拏天水生消火大事が記されている。更に宮家蔵の不動護摩私記裏書にも大火生三昧耶大祕法がおさめられている。また簡単なものには修験深祕行法符呪統集中に火伏の大事が収録されている。

湯立てに関しては修験道の根本資料である修験道章疏全三巻及び修験聖典中にはその次第を見ることは出来ない。しかし幸に宮家蔵の修験道護摩祈祷法裏書に「湯立の大事」が一法おさめられている。次に刃わたりについては、修験聖典に伊垣八劔法があり、宮家蔵の極祕護摩記裏書にも、伊垣八劔大祕法が記されている。

次の隠形、飛行自在に到ると完全な次第はますます得がたくなる。まず隠形に関してはわずかに修験深祕行法符呪集に、「不動隠形之大事」が、同統集の不動尊祕印中に「不動隠形の印」が、おさめられている。なおこのうち「不動隠形の印」は不動根本印の一つとして符呪集及び同統集中の他の箇所にも記されていることを見るとかなり重視されていたと考えられる。一方飛行自在の法は、修験深祕行法符呪集に「飛行自在の法」が一つと、修験深祕行法符呪統集所収の「大聖乙護祕法」の最後に「飛行自在印」が見い出されるにすぎない。

なおこれ以外にも、鉄火大事(鍬やきとも云う)熨松貫き祕法等が宮家蔵の次第中に散見するが、これらについては割愛したい。そして以下一応上記5つの験術の次第の代表的なものを紹介することにしたい。(傍点宮家)

(1) 大火生三昧耶法⁽¹⁾

先護身法	全身觀 成 <u>ウ</u> <u>ン</u> <u>字</u>
次無所不至印	帰命バ。オンバロダヤソワカ。
次金剛合掌	本尊及諸天念
諸天智水	本尊同智
正理清浄	火生成水

次外獅子印	ウーン。身火本
次大海印	散 _二 総身 _一 、オンメイギヤシヤニエイソワカ。
次水天印	外縛二大立合、オンパロダヤソワカ。
次劔印	ウーン。観 _レ 水
次根本印	火界呪三遍
次劔印	慈救呪二十一遍
次外五胡印	一字呪七遍
次入我我入	定印。

観心上有_二バ字_一 変成_二月輪_一。月輪変成_二智劔_一

智劔変成_二不動尊_一 相好円満 我身即成_二本尊身_一

次五大尊觀念 定印。

右手降三世明王，左手金剛夜叉明王。

右足軍荼利明王 左足大威徳明王。

総身不動明王，成，能々観。

次読経可任意

次松明所作。

(2) 湯立之大事⁽²⁾

先護身法	如常
外五胡印	具一切功德
内五胡印	慈眼視衆生。
智拳印	福聚海無量
水天印	両手金剛拳 _ノ 両頭指押左腰安右拳

オンパロダヤソワカ

天川ヨリヲツル水，ケシテタマエヤ

モユルホノホラ。

木を六寸に切りて六つ四方へ，バ，バと唱えて入る也。

(3) 不動隱形印。⁽³⁾

隱形印。

似_二外縛三胡印_一可_レ成_二大日劍印_一
明。慈救呪。

ロイ云。

二地二水盤石座，二火劍印不動尊
二頭火焰，二大指二童子，誦_レ咒後
開_二大_一唱_二行者実名_一吹入_二大覆_一
可_レ置_二想_一自身入_二其中_一。

(4) 伊垣八劍法。⁽⁴⁾

護身法

ウーン字觀

全身成_二金剛_一觀

次九字

掌中勝字。

次四明

次智拳印

劍刃にあてて，

伊垣八劍大明神 密事。アビラウンケン。

次紙にて試るべし。

次劍の刃を渡るべし。

次撥遣

彈指。

オンバサラボキシヤボク

次九字。

ウーン。ロイ。

次三部被甲。

次 天津神国津神ヲ元元天津国ニ帰ラセ給フ。

(5) 飛行自在印。⁽⁵⁾

飛行自在印、有 祕伝

金翅鳥印。抱 右空左空 相 合面 八指末

向 下 掌向 身、如 鳥左右羽

読 歌每動 之如飛瀦 甲ロイ

嵐吹木乃間乃風仁残利気口

向敵於吹気払七気利。

- 註 (1) 修験聖典 348 頁。
(2) 宮家蔵「修験道護摩祈禱法」に裏書きしてあるもの。
(3) 修験道章疏 二卷。 309 頁。
(4) 修験聖典 351 頁。
(5) 修験道章疏 二卷。 307 頁。

3. 験術のメカニズム

以上、大火生三昧耶大祕法、湯立之大事、不動隱形の印、伊垣八劔法、飛行自在印の五つの験術の次第をそのまま列記した。そこでまずこの順序に従って筆者があとづけえた範囲内で各次第の個々の symbolic action の意味を考え、そのメカニズムを分析して見る。次にそうしたメカニズムによって意図されている各験術のモチーフを抽出して見よう。そして最後にこの五つの験術全体についてそのメカニズムとモチーフを考えて見たい。

(1) 火床三昧耶大祕法、周知のように火床三昧の法は、まだいかつている炭火の上を修験者が歩くものである。火の上を歩くに先立って次の修法が行なわれる。

まず護身法をむすんで自分自身を清浄にしたあとで、全身が金剛薩埵と

なつたと感じ、さらに自身即不動心無二無別を示す無所不至の印を結び、水天に帰命することを誓つて水天の真言オンパロダヤソワカをととなえる。次に金剛合掌をむすんで五凡五聖がまじりあうこと（仏と修法者が一つであること）を示した上で諸天を念じ、諸天智水、本尊同智、正理清浄、火生成水とのとなえごとをする。このあと外獅子印をむすんで金剛薩埵の真言をととなえ、身火本（自分の体が火となることを示すと推測される）と観じる。次に大海印を結び、八大竜王の真言をととなえ総身に散じ、さらに水天の印とその真言、劔印をむすび水を観ずる。そして次には不動根本印、劔印、外五胡印、入我我入をへて本尊観を行ない、心上に水天があり、これがさらには不動明王となると観じる。次に五大尊観により右手が降三世、左手が金剛夜叉、右足軍荼利、左足大威徳、総身が不動明王というように自分自身が不動明王をはじめとする諸大明王になつたと観じ表白をととなえて火を渡るのである。

ところで表白によると火生三昧法は、「今行者の心に彼の三昧耶を観じ、火生三昧に入れば、凡身忽ちに本所尊の身となる。即ち身中の無明住地惑障を焼尽す⁽¹⁾」るものであるとされ、さらに、「外道葦陀徒は水を以て火を消す、自性を除く、火天は八大竜王及水神等を請ふ。之法予深く之を耻つ。水を以て火を消す世間の燥火なり。自性の火は火を以て火を消す。大智の火焰を以て世間の穢罪を焼尽す⁽²⁾」（傍点宮家）と説明されている。これで見ると火生三昧法の目的は、火の上を歩くことによって、大智の火焰で以て惑障を焼尽し、自身忽ち本尊不動明王となることであると考えられる。その際水を以て火を消したり、火天の助けで八大竜王や水神等をまねいて火を消す方法も見られるが、これは本来のものではなく、あくまで本来は火を以て火を消すことだと記されている。

そこでこの表白をよりどころにして今一度次第をかえりみて見よう。まず自己を清浄にし、金剛薩埵ひいては不動明王になつたと観じる。そして火生成水ととなえる。さらに自分の体が火になつたことを示すとも考えら

れる身火本とのとなえごとをとなえている。次にこうしておいて八大竜王や水天をまねぎ、水を観じ、水によって火を静めようとしている。このように火を静めておいて今一度不動法に準じて自分自身本尊不動明王となり、火の上をわたるというメカニズムになっている。こう見て来ると確かに最終的には自分が不動明王になることを示すのではある。しかしながら同時に実際に火の上を歩くことが可能だということを確信させるための二つのモチーフが交錯している。その一つは身火本というように自分が火になるということであり、今一つはむしろ反対に水で火を消して渡るという一見無盾したモチーフである。この兩者のうち表白では自分の体が火となって火によって火を消すことによって火の上を歩くという方が本来のものとされている。それ故、要約すれば、火生三昧法は修法者の体が火となることによって火の上をあるくことが可能だというモチーフから成立しているのである。

(2) 湯立の大事。湯立は生木三本でささえた釜に湯を入れて煮沸かし、白衣一枚になった行者が笹に湯をひたして頭にふりかけ、その釜に入るといふ順序で行なわれる。次第はまず護身法をむすんで自分を清浄にしたのちに胎蔵界の根本印である外五胡の印をむすび、一切の功德をそなえるととなえ、次に金剛界の根本印である内五胡の印を結んで、慈眼を以って衆生を視るととなえる。次に大日如来の根本印である智拳印をむすび、そのあと水天の印を結んで水天の真言をととなえ、「天の川よりおつる水、消してたまえやもゆるほのほを」ととなえて、さらに六寸に切った木を四方へなげ、「バ、バ」と唱えながら湯に入るのである。

このように湯立はさきの火生三昧法と同じく自身即大日如来となると観じ、次にさらにそのあらわれともいえる水を支配する水天となると観ずると共に、一方において水によって火の消えることを和歌になぞらえて祈りつつ釜の中に入っているのである。つまり自分が本尊と同じになれば湯の中でもやけどなどしないというモチーフと、水によって火を消すというモ

チイフが交錯しているのである。

(3) 不動隠形印, 不動隠形印は不動明王が磐石の座に座して二童子を従えている姿を symbolize する印をくみ, 「一切の金剛部衆に帰命し奉る暴悪大忿怒の形相を以て煩惱を破壊し悪魔を恐怖せしめ菩提心を堅固不動ならしめる」という不動の働きを示す慈救呪をととなえ, のち二大指をひらいて行者の名前を唱えたあと息を吹き入れて二大指をおおって自分自身がその中に入ると観想するというメカニズムになっている。これで見ると行者自身の息が(これが行者の魂とも考えられる)不動の中に入ることを表象している。換言すれば, 行者の体から魂だけがぬけて不動を表象した手の中に入り込むという肉体から靈魂の状態への transformation というモチーフがうかがわれるのである。

(4) 伊垣八劔大秘法 この次第はこれまでの次第とは多少違っている。まず護身法を行なって自分自身を清浄にしたあと, 金剛薩薩の真言をととなえて自分の全身が金剛不壊の身と成ると観じる。次に九字を切って邪魔ものをのぞいたのちに掌中に勝字を書き, 大日如来の根本印である智拳印を結び, 劔の刃にその印をあてて, 伊垣八劔大明神密事アピラウンケンとなえる。このアピラウンケンは成就を意味するといわれている。次に紙でこころみた上で刃の上をわたり, あと弾指して自分について来た諸魔をはらったのちに金剛夜叉の真言をととなえ, 九字を切り, 再度諸魔をはらい自分の身をかためる。そして最後に天津神, 国津神をもととの天津国へ帰すとの大和歌をととなえるというメカニズムになっている。

刃わたりの場合は次第がこれまでのものところが複雑なものであるにもかかわらずそのモチーフ推測の手がかりとなる表白の類が全然見られない故次第から直接この験術のモチーフを推測する以外にすべがない。そこで今一度この次第をよくながめて見ると, 自分自身金剛不壊の身更にはその根本ともいえる大日如来となって劔の刃をわたるというモチーフと, 九字を切り, 弾指をし, 自分のこうした修法の邪魔をする悪魔をおいはらう

というモチーフ、神々を天の国へもどすというモチーフが交錯していると考えられるのである。そしてしいて考えれば、邪魔をする悪魔をおいはらい、天の神、国の神の守護のもとに自分自身金剛不壊の身となって刃の上をわたるというモチーフを抽出し得ると思われる。

(5) 飛行自在印、この印は行者自身が鳥となり、はばたきをしながら飛んで行くというメカニズムになっており、この間に羽をうごかしながら、「あらし吹く、木の間の風にのりき□向う敵を吹き払いけり」との歌をとえという順序になっている。これで見ると向う敵をおいはらいつつ風によって空をとんでいくというモチーフが推測できよう。

さて以上5つの験術の各々について主として次第の順序をおいながら、そのメカニズムとそれから推測されるモチーフについて考えて見た。そこで次にこれらの5つのものに共通なメカニズムとモチーフについて考えて見たい。

まず火わたりと湯立てはいずれも修法者が崇拜対象たる本尊（火渡りの時は不動明王・湯立の時は大日如来）となったと観じた上で火を渡るなり、湯に入るという行為に入ることを示している。特に火わたりの時は自身火と観じ、湯立の時は自身水を観じている。次の隠形は修法者の息を不動明王に吹きこむことによって、自身不動明王となることを示している。このことは、修法者のたましいが一時彼の体から遊離して、崇拜対象の中に入りこむことをあらわすとも考えられる。このようにこれらの次第にはいづれも修法者が俗なる人間から崇拜対象そのものすなわち別の存在にかわるというモチーフが共通に見られるのである。同じことは、金剛不壊の身、大日如来となり刃をわたる刃わたりについてもいえるのである。更に飛行自在印になると、空をとぶ鳥にかわるというのであるからその transformation はより real になる。

これをそのあとですぐおこなう不思議な行為とむすびつけて考えると、俗なる人間とは違った存在になったが故に、こうした不思議なこと——験

術——をなし得るということになり、裏がえしていえば、これらの行為は他の存在への transformation を自分自身なっとくすると共に、見物している信者にも示すという働きをなしているとも考えられるのである。勿論そのためには水をふらすとか、悪魔をはらうとか、空を飛ぶまねをする等の苦肉の策としての工夫も必要であったろう。こうした工夫が験術のメカニズムの中にかくみにおりこまれているのである。

こう見てくると、これら五つの験術にある程度迄共通に見られるのは、修法者が現実に存在する俗なる人間とは別の違った存在に transformation するというモチーフであり、こうした transformation の結果、火を渡り、熱湯に入り、刃をわたり、空を飛ぶ等の不思議なことで出来ると信じられたのであろう。他方これらを失敗なく行なうために、水をふらすとか、悪魔をはらうとかのいくたの苦肉の策としての工夫が、験術のメカニズムとして作り出されたと考えられるのである。

- 註 (1) 修験聖典 349 頁.
 (2) 修験聖典 349 頁.

4. 験術に見られる世界観

今私は修験道の験術の次第の分析によって、そのメカニズムとモチーフを抽出して見た。次にこれらのモチーフやメカニズムがいかなる世界観を物語っているかを考えることにしよう。

ところで、これらの修験道の験術にみられる諸行為は、修験道の神話的開祖である役小角の宗教活動の中に類似のものを数多く見出すことができる。そうして見ると、Eliade や Stanner が分析したように⁽¹⁾、神話的開祖である役小角に仮託された宗教活動の中にこれらの験術に見られるモチーフの意味を解明するかぎがあるとも考えられるのである。

そこで、修験道の開祖役小角の事蹟の中からこれ迄記した験術に關聯した行為を引き出して見ることにしよう。まず修験道勤行集の役小角講式には、「五色の雲にのりて仙府に優遊し、鬼神を降伏して隨遂の使者となす⁽²⁾」とか、「あるいは時に天に騰りて形を隠し、或は時に空に座して身を頭す⁽⁸⁾」ともあり、さらに高祖講式には、「天に登りて形を隠し、亦地に入りて跡を埋む⁽⁴⁾」とか、「飛行自在力神通よく物を制す、機縁をトす⁽⁵⁾」とかいわれている。これらを見ると 役小角は自分の形を隠したり、飛行自在であったり、天にのぼったり、地に入ったりする等の行為をしたと信じられていることがわかるのである。また日本靈異記には、役行者が鳥のように空をとんだこと、殺劔の刃を伏しその上をあるいたこと等が記してあると修験者行智はその著「木の葉ごろ裳」の中で指摘している⁽⁶⁾。

このように役行者自身も姿をかくしたり、刃の上をあるいたり、飛行自在であったり、更に自由に天にもものぼって機縁をトしているのである。要約すれば、元来俗なる世界にいる役小角が、飛行自在の法によって、天界(仙府)に自由に入り得るというモチーフが、これらの伝説から推測できるのである。そして修験道の験術が役小角の事蹟の反復であることから考えると、これらの験術は、ある意味では役小角を自分達の開祖とした修験者が、開祖と同じ行為を再現することによって自己の信念体系の強化をはかるものであるとも考えられるのである。

しかしながら役小角は最初に述べたように教団体制が確立した後世において開祖にたてまつられたものであるから、開祖に仮託されたこうした事蹟は役小角の実際に行ないとは関係なく、教団体制確立後に修験者が作りあげた世界観を物語っているといった方がむしろ正鵠を得ていると思われるのである。

そこで筆者がこれ迄の研究で明らかにした修験道の世界観の中に役小角伝説から抽出したモチーフ——更に験術の次第から抽出したモチーフ——を位置づけて見よう。

修験道の世界観の根本になるのはまずその教義からすぐ推測できるように山岳である。すでにたびたびふれてきたように、修験者の間では、山岳を現実の世界とは異なった浄土又は霊の世界と見る見方が広く見られている。また羽黒修験の秋の峰から分析すると、山岳は天地合体の場所とも見られているのである。このようにとらえられた山岳に入って修行することによって、修験者はいわば霊の世界に行くと共に、そこで所定の修法を学ぶことにより、常時現在の人間の運命を支配する諸霊の世界に入り、そこでの諸事情を知り得ると共に諸霊を操作する力を体得すると考えられているのである。つまり修験者は何時でも霊の世界に入って行き、現在の人間の不幸の原因となっているたたりの原因を知るとともに、その不幸をとりぞくことが出来る超自然力を持っていると信じられているのである。ところでこの霊界は小角伝説のモチーフとあわせて考えると元来山の上の天にあるものと推測される。ちなみに修験道で加持祈祷の際に広く見られる息災護摩の論理を分析すると、護摩をたいて天の使いである火天を呼び、修験者自身火天となって天に行き、諸宿曜等に依頼者の不幸の原因をきき、本尊不動明王その他の明王の力により、不幸のもとになっている悪霊を消除するという論理構造になっている。

ここまで記して来ると容易にきづかれるようにこうした修験者の性格は shaman の宗教活動ときわめて類似しているのである。そうした理由もあつてか、すでに堀一郎教授、鈴木昭英氏等⁽⁷⁾によって修験道とシャマニズムの関係が論じられている。そこで筆者も一応こうした立場をうけて、主として Eliade の所説をもとにして、shaman の験術やその世界観を足がかりとして、修験道の験術の意味を究明して見ることにしたい。

Eliade によると shaman は ecstasy (trance, 靈魂離脱・意識喪失) を行使して一時的に魂を肉体から分離させ、それを不可知の世界である天界や地上界に旅させる能力をそなえた人のことであり、ecstasy の間に精霊が shaman の肉体を占領してその口をかりて託宣を下すことも多いとい

われている。また Hawels は shaman は精霊が自分の所に来るように召換する能力を持つといい精霊に話しかけてその欲することをきいたり、さらにそれを人につけることも出来る⁽⁹⁾といっている。

ところで、こうした shaman の行なうまつりの際にも、火わたり、釜ゆで、刃わたり、隠行、飛行自在等の特殊の験術が行なわれているのである。

まず火わたりは、満洲、朝鮮の shamam・Buryat の shaman・New Mexico の Pueblo Indian・インド・チベット・インドネシア・ポリネシアの shaman 等アジアから北米にかけての諸地域に見られる。そしてインドでは shaman の体が充分熱せられると奇跡を達成することが出来るといわれており、火の上をあるくのは shaman の体が充分に熱せられていることを示す証拠であるといわれている⁽¹⁰⁾。また Buryat では shaman が俗体から離れて spirit にかわったことから、火の上を歩くことが可能であると信じられている⁽¹¹⁾。shaman が俗体から離れて奇跡を行ない得る熱い体になったり、また spirit にかわったりしたとすると、湯の中に入っても火傷をしないということも当然のことながら推測できよう。この例は北アメリカにも見られるが、エスキモーの shaman では逆に氷の中に入って自分の体が熱くなっていることを示すといわれている。また shaman が自分の spirit を遊離させ、姿をかくす例も各地に散見するとされている。このように shaman は熱い体の状態に入ったり、または自己の肉体から魂を遊離させたのちに ecstasy に入るのである。

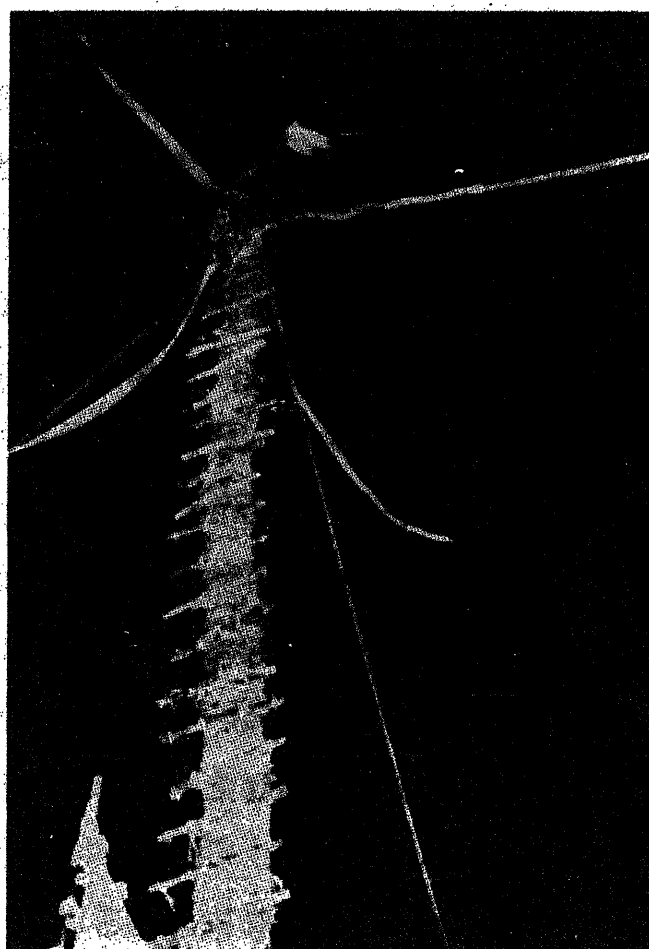
さて、こうした考え方は、修験道の験術の場合にも或る程度推測される。現在の修験教団の火わたりは便宜上採燈護摩のあとの火をくずして行なうことが多いが、少なくともそのあとで祈祷は行なわれている。けれども岩崎氏の調査による相馬地方の一連の火わたりの例は、火わたりを行なっただけから神がかりに入るとされ、さらに阿蘇神社の例も巫がよりしろとも見られる乙女をつれて火を渡っているのである。湯立の場合も熊本の木原不動

ではかなり show 化しているが、火わたりとかまゆでの両者が行なわれたあと祈禱がなされている。火生三昧法の次第を見ると、一旦修法者が身火本と観じてのちに不動となっているのである。更に隠形の印では肉体から魂の遊離がより real に示されている。これらを見ると本来は、火渡り、湯立、隠形等の験術は、修験者が ecstasy の状態に入るに先立って、その準備として体を熱くしたり、身体から spirit を遊離させることを示すものと考えられるのである。けれども、やがてこれが修験者自身もそうしたことを信者に見せて shaman としての自己のすぐれた能力を顕示するとともに、自分自身も自己の能力を確信するための儀礼となったものと考えられるのである。そしてその show 的な要素が強まるにつれて、苦肉の策として、水天や竜神をまねいて火を消すことをこれに依頼するというモチーフがこれにつけ加えられたとも考えられるのである。

さて、Eliade によると shaman の重要な要素は ecstasy に入って自分の靈魂を天または地下に旅させることであるとされている。我々は火渡りや湯立てが、修験者が ecstasy に入り得る力を持つ事を示す——肉体から魂を遊離させること、または ecstasy の必要条件である inner heat を獲得すること、——demonstration と考えたが、そうすると次には、幽界である天にのぼることまたは地下に入るというモチーフが修験道ではどうとらえられているかが問題となる。

周知のように修験者が霊界に行く事は入峰修行に最もよくあらわされている。またさきに記したように役小角が天にたびたびのぼったとの伝説は、開祖に仮託されてはいるものの、彼等が天に入る能力を得ることを理想とし、実際にそうしたことを行ない得ると確信していたと思われるのである。修験者が地域社会にあって実際に天にのぼることを symbolize したもっとも typical な儀礼には、堀一郎教授によって指摘された柱松の神事がある。⁽¹²⁾ この儀礼は大きな柱に階段が作られ、修験者がこの階段をのぼることによって天にのぼることを symbolize するのである。戸隠・彦山

等の修験者がしきりにこれを行ない、民間信仰化したものとしては、愛媛県八幡の天満神社の祭（第2図）、越後妙高山の柱松等があるといわれている。ところで問題は、この柱にしつらえられた階段である。Eliadeによると中国では天にのぼるのに十二段の劔の階段をのぼるとされた⁽¹³⁾。また琉球でもナイフを柱にたてて梯としたという⁽¹⁴⁾。さらに修験者行智は、「利劔を交えて梯とし」といっているのである。伊垣八劔法の次第から見ると、金剛不壊から更に本尊となった修法者が刃の上をあるいてい



第2図 愛媛県八幡天満宮の柱松

るのであり、これを直角にふみ進むことが秘伝とされている。そうするとさきに意味のとりにくかった刃わたりは、魂の状態になった修法者が実際に天にのぼることを示していると考えられるのである。

梯によって天にのぼるというモチーフと並んで、容易に推定されるのは鳥になって天に飛んで行くというモチーフである。これはシベリアの shaman には多く見られ、G. Nioradze によれば、shaman の服装そのものの中に、太陽に向って飛んで行く shaman の姿を示したものを見ることが出来るといわれている⁽¹⁵⁾。修験道の飛行自在印において鳥の飛ぶ事を表象することはすでに見たとおりである。更に役小角伝説にも随所にわたって行者が空を飛んだことが記されている。現に羽黒山の秋の峰、松例祭においてははからすがとぶまねをする儀礼があり（第3図）、岡山県の両山寺等では神がかりした人が鳥の飛ぶまねをしている。また、符咒集所収の飛行



第3図 羽黒山松例祭の鳥とび

自在の法では、摩利支天(太陽)に向って修法者が飛んで行くことを示す修法が記されている。⁽¹⁶⁾ これらの一連の儀礼はいずれも、修法者の肉体から遊離した魂が天界に飛んで行くことを示すと推定されるのである。

以上見てきたように、火わたり・湯立・隠形の法は shaman が自己の肉体から spirit を遊離させること、または ecstasy の状態に入る前段階としての inner heat の状態になることを示すものと考えられるのであり、これに対して、飛行自在、刃わたり等の法は、ecstasy

の段階に入った修法者が梯子を用いたり、とんだりして天にのぼることを示していると考えられるのである。そして修験道の験術は現在はほとんど断片化してしまっているけれども、本来はこの火わたり、湯立て、隠形の組と、刃わたり、飛行自在の組の両者がくみあわさって、修験者が天界に入るための修法を形造っていたと考えられるのである。そしてこうした験術の背後には霊界(天界)と俗界の区別と、俗界から霊界(天界)に入り得るものとしての修験者の存在を意義づけている修験道の世界観が存在しているのである。

註(1) 未開人の宗教的世界観が自分達の先祖の行ないとして説明され、さらにそれが宗教儀礼の中で反復されるとの分析。

Stanner: The Dreaming. in Lessa and Vogt. "Reader in Comparative Religion." 1958 参照。

Eliade. "Myth of Eternal Return" 1950 参照.

- (2) 修験道本庁「修験道勤行集」.
- (3) 修験道本庁「修験道勤行集」.
- (4) 修験道章疏 二 117 頁.
- (5) 修験道章疏 二 117 頁.
- (6) 行 智「木の葉ころ裳」巻上.
- (7) 堀 一郎「修験道とシャマニズム」, 昭和 39 年神道宗教学会発表
鈴木昭英「山岳信仰・修験道とシャマニズムとの関係」(大谷史学第八号).
- (8) Eliade "Shamanism" 1964 参照.
- (9) 古野清人 原始宗教. 233 頁.
- (10) Eliade: Op. Cit., pp. 412.
- (11) Eliade: Op. Cit., pp. 206.
- (12) 堀 一郎. 昭和 39 年神道宗教学会発表.
- (13) Eliade: Op. Cit., pp. 455.
- (14) Eliade: Op. Cit., pp. 485.
- (15) ニオラツェ「シベリア諸民族のシャマン教」 119 頁.
- (16) 修験道章疏 二 165 頁.

結

私は本小論で、現在はほとんどその本来の意味を失ない、インチキであるとか、カラクリがあるとかいわれがちの、火渡り、湯立て、隠行・刃わたり、飛行自在の法等の修験道の験術をとりあげて見た。そして、これらの験術は修験者の宗教生活に身近かなモチーフをもとにしてくみたてられたメカニズムをもっていると想定し、更にこうしたモチーフは同時に修験道の世界観のうちに位置づけられるとの立場にたった。実際の分析にあたっては逆に験術のメカニズムをとおしてそのモチーフを抽出し、更にその意味を修験道の宗教的世界観に位置づけて分析して見るという順序をとった。

すでに私はこれまでの研究で、修験道においては、世界は霊の世界と現

実の世界に分けて考えられており、現実の世界での不幸等はすべて霊の世界の現象にきせられる。山は現実の地上における霊の世界を示す場所であり、修験者はそこに行って initiation ceremony をへることによって、いつも霊の世界に行き得る資格を得る。それ以後は何時でも必要な時は霊の世界に入って行き、庶民の生活の不幸の原因をしり、それをのぞく修法をすることが出来る、という宗教的世界観を示して来た。⁽¹⁾

ところで、梯子をのぼったり、空をとぶことから推測されるようにこの霊界は役小角伝説に見られるように天にあるとされ、修験者は自分が必要な時は、所定の儀礼を行なうことによって何時でも天にある霊の世界に入って行った。このように修験者が天上の霊界に入る儀礼が現在の験術の古型であると推定されるのである。つまり、肉体から魂の遊離を示す火わたり、湯立て、隠行の術と、天にのぼることを示す刃わたり、柱松、飛行自在の術は元来はこうした ecstasy の状況における修験者の spirit の霊界旅行を示す儀礼であったと考えられるのである。

けれども、同時に修法を行なう修験者の側では、こうした儀礼をとおして、彼等が天上の霊界に入っているのだということを信者に示し、また逆に自分の信念も強めることも必要であったろう。この意味では修験道の験術は、修験者の霊界に行く能力の demonstration としての性格を持つものである。このように修験道の験術は、上記の世界観のうち、修験者が天にある霊の世界に入って行くことを symbolic action として行なうものであり、副次的にはそうした行為を信者や見物人に見せることによって自己の shaman としての力を示すと共に自己の信念を強めて行くという機能をはたしていたと考えられるのである。

そして例へば相馬地方や岡山県の両山寺のように修法者が火を渡ったあと trance の状態になり、鳥の真似をして託宣をすることや、飛行自在の法において、飛行の印に先立ってまず隠行の印を結んでいることはこうした験術の世界観を如実に物語っているものであり、更に修験教団において

火わたりや湯立てのあと祈祷をし、信者の側でも積極的にこれを求めていることは、修験者の側での shaman としての能力の顕示を信者の側ですんで受け入れていることを示すものとも思われるのである。

上記して来たように、私は現在はほとんど断片化してしまいましたが残ったものも show と化した修験道の験術は、元来天上の靈界に入行って依頼者の不幸の原因を知り、それに応じて祈祷をするという修験道の世界観にのっとりた修験者の宗教活動の前段階——まず魂に姿をかえて天にあがること——を示す儀礼であると考えて見たのである。そして修験者はこうした験術を信者に見せることによって彼等が現実に天にあがることを——あがる力を持っていることを——信者に示すと共に彼等自身も自分の能力を確信するてだてとしていたということも推測してみたのである。

(40. 6. 10)

註(1) 宮家 準 「修験道の入峰修行におけるシンボリズム」
宮家 準 「修験道の思想」

哲学 46 集
哲学 43 集